

令和8年度 北区立小学校学力向上を図るための全体計画

令和8年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	3～6学年は目標値を上回ったが、2学年が目標値を1.7ポイント下回る結果となった。特に2学年の「書くこと」や6学年の「理由を明確にして記述する力」に課題がある。低学年からの文作り指導や、高学年での構成を考えた文章表現の指導を継続する。
社会	5学年は目標値を15.7ポイント上回り非常に良好だが、6学年は区平均を3.4ポイント下回った。資料を読み取る力や、複数の資料を関連付けて考える「思考・判断・表現」の力、用語（八方位など）の定着に一部課題が見られる。
算数	3～5学年は目標値を上回ったが、2学年と6学年が目標値を下回った。2学年の「時計・形」、6学年の「分数の計算」など、特定の基礎技能の不足が顕著である。図や言葉を用いた具体的なイメージ化と、数学的根拠に基づいた説明力の育成に重点を置く。
理科	5学年は前年度比12.2ポイント向上し良好だが、4学年と6学年が目標値を下回った。特に顕著な課題として、顕微鏡などの実験器具の操作技能や、理科学語（結露など）の定着、実験結果から論理的に考察する力が挙げられる。
外国語	全体の正答率は目標値を上回った。リスニングによる音声理解は極めて良好である一方、アルファベット（特に小文字の j, b, l, g など）を正確に書く活動に顕著な苦手意識やつまずきが見られる。

本校の教育目標
◎よく考える子
◎体をきたえる子
○思いやりのある子
○最後までやりぬく子

本校が児童に育成したい力
・「北区基礎・基本の定着度調査」等の結果を基に個に応じた指導を充実させ、「読み・書き・計算」の習熟と各教科の基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を目指す。 また、習熟度別指導、学力フォローアップ教室での補充等、組織的な指導体制や指導方法を工夫して更なる学力の向上を図る。 ・発達段階に応じた思考力・判断力・表現力や学びに向かう力を養うとともに、基礎的・基本的な知識・技能を活用した発表や話し合い活動等の言語活動を充実させ、問題を解決する能力の育成を図る。 ・教科等の見方・考え方を働かせた主体的・対話的で深い学びの実現のため、教科等横断的な指導を進めていく。また、授業観察による指導・助言や校内研究・研修の充実を通して授業改善を図る。
校内における学力向上推進体制
学力向上に関する特別委員会（研究推進委員会、学力向上・少人数推進委員会、通知表委員会、特別支援教育委員会）、分掌（授業改善推進プラン、学校図書館、放課後補充教室（学力フォローアップ教室）等を有機的に機能させ、児童の学力向上を図る。

学力向上にかかわる経営方針
「学校は勉強をするところ 集団生活（社会性）を学ぶところ」 ・子どもが達成感と満足感を感じ、挑戦しようとする意欲をもつ学校づくりを推進 「確かな学力の定着」 ・少人数習熟度別指導、個に応じた指導・補充学習・家庭学習・校内研究

本校の授業改善に向けた視点				
指導内容・指導方法の工夫	教育課程編成上の工夫	校内における研究や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携の工夫
・課題解決型・探究型授業の実践 ・児童に「わかる」「できる」喜びを味わわせる授業づくり ・学習活動「振り返り」の充実と継続 ・十分な教材研究によるねらいの明確化 ・児童が主体的に取り組む学習活動 ・GIGAスクール構想に基づく、きたコンの積極的な活用 ・WEBQ－U調査を活用した学級経営	・授業時間確保のための学校行事の継続的な見直し ・放課後補充教室（フォローアップ教室）の充実 ・きたコンを活用した学習タイムの推進（個別最適化した学習） ・日本語学級の充実と担任との連携 ・算数科少人数習熟度別指導（3～6年）による確かな学力の定着	・北区教育委員会および東京都小学校体育研究会の研究協力校として、体育科の健康課題をテーマとした授業改善と、自ら学び続ける力を仲間とともに身に付けていく授業の研究の推進 ・授業観察を通じた具体的な指導・助言の実施及び、組織的な授業改善 ・サブファミリー内での指導方法の共有 ・幼小中学校間の交流指導を通じた連携研修及び、義務教育9年間を見通した系統的な授業改善の推進	・児童の実態に即した評価規準に基づいた観点別評価の実施 ・評価規準や評価方法の工夫・改善（きたコンを利用したデジタルポートフォリオの活用） ・PDCAサイクルを意識した指導と評価の一体化	・保育園等との交流 ・ホームページの充実と更新 ・学校ボランティア、PTAとの連携 ・学校便りの発行（月1回） ・児童の変容を自身も保護者も感じる事ができるキャリアパスポートの活用

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案（5年）

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
国語	全体の平均正答率は73.1%と、目標値（65.2%）および区平均（71.7%）を上回る結果となった。しかし、領域別では「言葉の特徴や使い方に関する事項」のうち、連用修飾語の理解が32.1%と目標値40%を下回っていた。また、「漢字を書く」についても、一部の漢字の習得率が目標値以下にとどまっており、知識・技能の定着に課題が見られる。	文法指導においては、言語活動を通して、文法の指導事項を体感的に理解できるようにしていく。漢字指導では、小テストを繰り返し実施することによって、漢字の正しい理解と、文章の中で積極的に使う習慣を定着させ、日常的に漢字を使う機会を増やしていく。また、説明文の読解では、段落相互の関係や説明文の構造を意識させるために、構成図やワークシートなどを活用した情報の整理を重点的に行っていく。	つまずきが見られる児童に対しては、児童用端末（きたコン）のドリルソフト等を活用し、個々の習熟度に応じた反復学習を行う。自分の考えとその根拠を明確にして始め、中、終わりの構造を意識した意見文や報告文を書く活動を行い、構成力と表現力を高めていく。
社会	全体の平均正答率は80.3%と極めて高く、全ての領域で目標値を大きく上回った。特に「生活環境を支える活動」や「自然災害からくらしを守る活動」の定着度は良好であった。一方で、地図の読み取りにおける「八方位」の活用（62.3%）や、「先人の働き」における資料の読み取り（56.6%）が、他の項目に比べてやや低い傾向にあった。	方位や地図記号などの基礎知識は、社会科見學と関連付け、実際の風景と地図や方位を照らし合わせて意識させる学習を取り入れる。資料活用においては資料から読み取れることを明確にした上で複数の資料を比較・関連付けて考える活動を設定し、活用力を身に付けられるようにしていく。	ICT機器や図書資料を活用し、興味をもった地域や事柄について「課題の設定・情報収集・整理分析・まとめ」のサイクルを取り入れた学習を実施していく。スライド作成や新聞形式など、児童に選択した方法での成果物作成も検討していく。
算数	全体の平均正答率は70.9%（目標値62.2%）であった。領域別では、「面積」における身近なもののおよその面積推測（16.7%）や、「平行四辺形の作図」（25.9%）が目標値を大幅に下回っていた。また、計算のきまりにおける「分配法則」の活用（40.7%）にもつまずきが見られた。	量感を養うため、実測・推定などの算数的活動が多く取り入れる。図形指導では、ICT端末上で図形を動かしたり、分度器やコンパスを用いた作図の様子を動画で確認したりすることで、技能の確実な習得を図る。計算指導では、答えを出すだけでなく「なぜその式になるのか」というプロセスを言葉や図で説明する活動を重視していく。	算数少人数担当教員との連携を密にし、作図や計算のきまりを中心に、つまずいている児童への個別支援を強化していく。習熟度の高い児童には、既習事項を組み合わせで解く発展問題や、日常生活の課題を算数的に解決する問題を提供し、思考力を伸ばしていく。
理科	全体の平均正答率は69.0%（目標値57.9%）と良好であった。しかし、天体に関する「満月の1日の動き」が39.6%と目標値を下回っていた。また、「自然の中の水」における「結露」の用語理解（34%）や、現象の理由説明（39.6%）にも課題があり、「理科の学習用語」を使った論理的な説明力に改善の余地が見られた。	直接学校での観察が難しい単元については、デジタル教材のシミュレーションを活用し、視覚的に理解させていく。また、実験・観察の記録をとる際、「結果」と「考察」を明確に区別し、既習の用語を使って「なぜそうなるのか」を記述する指導を徹底していく。理科支援員と連携し、予備実験を充実させることで、児童が確かな実感を伴って学習内容を理解できるようにしていく。	観察・実験の様子を動画や写真で記録し、ICT端末で繰り返し振り返ることができる環境を整えていく。発展的な学習として、学習内容と実生活の結びつきにも目を向けていく。